

あるルーブリック評価の問題点と改善案

齊藤 公輔^A

アブストラクト: ドイツ語のプロジェクト授業「大学紹介ムービー作成」の評価基準にルーブリックを用いたが、本発表ではこの中の文章表現(文法)項目を取り上げる。この項目は他の項目に比べ点数が低い傾向にある。学習者アンケートを分析することでその原因や特徴的傾向を探り、そこから本項目を設定する際のより良い方策を提案する。その際、特に授業における学習者主体的の文法学習スタイルについて考える。

キーワード: ルーブリック評価, データベース型ツール, 文法学習, 『外国語学習のめやす』

1 はじめに

本発表は、平成26年～28年度科学研究補助金基盤研究(C)『ドイツ語教育におけるツール活用型プロジェクト授業モデル開発と戦略的評価方法の構築』(課題番号25370667)の助成を受けている。本発表では特に評価方法の構築の観点から、実践したプロジェクト授業のルーブリック評価を批判的に検討するものである。

2 授業概要とルーブリック評価

2.1 授業概要

本プロジェクト授業は、中京大学国際教養学部のドイツ語コース1年次生23名を対象に行った。実施時期は2014年の11月から12月、割り当て授業数は5回である。クラスを3名×6班と4名×1班に班分けし、毎授業60分程度活動した。

プロジェクト内容は、中京大学の紹介動画をドイツ語で作成しYouTubeにアップロードするというものである。中京大学には現時点でドイツに交換留学先を持たないため、留学締結を呼びかけることを目的として作成させた。

このプロジェクト授業の原型は、2014年8月2日～6日に開催された公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)主催の『外国語学習のめ

やす』マスター研修2014に参加した際に作成した授業案である。それゆえ、例えば「3×3+3」など『外国語学習のめやす』特有のツールが用いられている。

なお、本プロジェクト授業で学習者に提示した指示文や指標、次に紹介するルーブリック評価表などはすべてTJFのホームページ上で公開されている。以下にURLを記載するので、必要に応じて参照いただきたい。

http://www.tjf.or.jp/meyasu/support/docs/challenge_k_saito_201412.pdf

2.2 ルーブリック評価文法項目の結果

本プロジェクト授業で用いたルーブリック評価表の項目は以下のとおりである。

- ・文章表現(文法)[以下文法と記載する]
- ・動画の工夫
- ・内容の的確さ
- ・発音、声の大きさ
- ・指示への対応

それぞれ「目標以上」4点、「目標達成」3点、「目標まであと少し」2点、「もっと努力しましょう」1点とした。本発表で取り上げる文法では、名詞、動詞、前置詞、接続詞を評価対象とし、間違いの数に応じて配点することとした。この項目の採点は動画とともに提出させた台本を対象としたが、7班すべてが1点であった。

A: 中京大学国際教養学部

3 学習者アンケート

3.1 アンケート概要

この事態の原因を探るために次のアンケートを実施した。このとき発表者は、文法の点数が低い理由は学習者が本項目を重視していなかったためと予想していたが、結果は全く異なっていた。

アンケートの項目は以下の通りである。

- ・最も重視した項目
- ・最も重視しなかった項目
- ・最も達成できたと思う項目
- ・最も達成できていないと思う項目

学習者はこれらの設問に対し、その理由とともに項目を記入した。

3.2 アンケート結果

アンケートの主な結果は次の通りである。ここでは各設問に対し文法を挙げた人数と、その順位のみを記す。

- ・最も重視した：8名（第1位）
- ・最も重視しなかった：2名（第4位）
- ・最も達成できた：4名（第3位）
- ・最も達成できていない：4名（第2位）

このアンケートによって、学習者は文法に最も注意を払っていたことがわかる。これは発表者が事前に予想した結果とは全く反対の結果であった。

一方達成度に関する設問について「自身の文法は最も達成していなかった」と回答した学習者は4名しかいなかった。これは全班とも文法の点数が1点であったにも関わらず、文法の誤りを適切に振り返ることができていないことの表れと言える。また文法を最も重視した学習者のうち、同項目が最も未達成であったと回答した者はいなかった。なお最も多く挙げられた未達成項目は発音、声の大きさ（15名）である。

以上の結果を総合的に評価すると、学習者は文法に最大の注意を払う一方で、自身の文法の正誤を適切に判断できない、誤りに気付くこと

ができないという傾向があったと言える。それゆえ本発表で紹介するプロジェクト授業およびそこで用いたルーブリック評価は、学習者が自身の文法の誤りに気付く仕掛けを施すことで、より効果を上げることができたと言えよう。

4 改善案

学習者が文法の誤りに気付くための仕掛けとして、以下の方策を提案する。すなわち、携帯端末向けデータベース型ツールの使用をプロジェクト内に組み込むことである。すでに齊藤ほか（2013）において File Maker を用いた動詞活用形学習ツールの開発が行われているが、これを文法学習に応用できるよう改良し学習者に配布する。

今回のアンケートで顕著であった事は、学習者は自身の発音の可否を聞いて判断できる一方、文法の可否は読んでもわからないという点である。つまり正確な音との比較が可能な一方、正確な文法の比較ができないということである。そこで、文法的に誤った例文を提示し、学習者が誤っている個所を指摘・訂正するというツールの開発が望ましいと考えられる。

ルーブリック評価の項目は、文法間違いの数の代わりに、ツールを用いて学習した時間を基準とすることを提案する。これはルーブリック評価そのものを単純化するだけでなく、形成的評価としても用いることが容易であるなど、プロジェクト授業実施の課程でも振り返りを行いやすくなると考えられるからである。

次年度には以上の改善案を施したプロジェクト授業を実施し、今年度との比較を行いたい。

引用・参考文献

『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』、公益財団法人国際文化フォーラム、2013年
田原憲和、池谷尚美、齊藤公輔、神谷健一：「ドイツ語授業におけるデータベースソフトウェア活用の可能性」、『立命館高等教育研究』第13号、2013年